

特集：患者の権利と医療情報の提供—病院図書室の果たす役割

公共図書館における 医学書の所蔵状況とレファレンス

堀 江 保太郎

1. はじめに

95年版「出版年鑑」（出版ニュース社刊）によれば、年間53,890点の新刊書が出版され、その内に医学・薬学関係の図書が2,886点含まれている。

近年、どこの自治体もニューメディアの導入に力を入れていて、情報提供の機能を高めているが、公共図書館における出版物の資料提供に関しては、単純に新刊図書の受入点数だけを見ても、20%も満たしておれば、多い部とせねばならず、質量ともに未だ十分とは言えないのが現状である。

そうした態勢にあって、公共図書館では、例えば阪神地域では「阪神地区公共図書館協議会」のもとに、各自治体の図書館がネットワークを結んで、資料不足をカバーしている。

また、東播磨地域や西播磨地域においても、それぞれ「東播磨地区図書館等連絡協議会」や「揖龍公共図書館連絡協議会」という名のもとに、広域の相互サービス協定を結んで、利用者への資料提供に積極的に取り組んでいる。

病院図書室における患者への医療情報の提供と、公共図書館における住民への資料提供とは、図書館の設置目的からして、基本的に異なっているが、情報を求めて頼って来る患者や住民に対する図書館としてのあるべき姿は、共通しているのではないだろうか。

ほりえ やすたろう：前加古川市立図書館館長

2. 医学書の所蔵状況

兵庫県下には、分館を含めて61館の公共図書館がそれぞれの地域で活動している。

表1に掲載の10館は、県立図書館を除き、特に理由があって抽出したものではないが、比較的行政人口の多い市から、本館のみを選んで調査した結果である。

加古川市立図書館にあっては、できるだけ新しい資料が利用者の目につきやすいように、分類の分野にもよるが、出版年数がほぼ5ヶ年を経過した図書については、書庫入りにするよう心がけている。

特に医学、工学関係の資料では、常にホットな情報が要求されるのであるが、現実には書庫などのスペースの関係や購入予算の関係からも、必ずしも方針どおりの新鮮さで開架室の書架が満たされているわけではない。

公共図書館全般について言えることは、地域によって様々な特徴を持った蔵書構成をなしていることである。例えば、地場産業に関連した特許関係の資料とか、地域に縁の著名人に関連した郷土資料など、内容面においても充実してきて、図書館間の相互協力活動が利用者にも認識されてくるにつれて、各館所蔵のそれらの資料の活用される機会が多くなってきている。

ところが、医学、医療関係の資料収集については、必ずしも公共図書館が積極的であるとは言えない。その理由は、大方の予想どおり、医学、医療の分野は選書にあたっては、いかに司書といえども専門性において限度が

表1. 兵庫県下の公共図書館における医学書の所蔵及びレファレンスの実態

館名	蔵書 (冊)	医学関係図書 (冊)	医学関係図書の 占める割合	レファレンス等の実情
兵庫県立図書館	265,000	約9,000	3.4%	文献案内程度
神戸市立中央図書館	713,000	未回答		事典等で答えられる範囲
姫路市立城内図書館	261,000	約5,000	1.9%	一般的な文献紹介
尼崎市立中央図書館	360,000	未回答		一般的な文献紹介
尼崎市立北図書館	150,000	約2,000	1.3%	一般的な文献紹介
西宮市立図書館	494,000	約5,100	1.0%	文献紹介、医学事典
明石市立図書館	182,000	約2,000	1.1%	一般的な文献紹介
伊丹市立図書館	322,000	未回答		一般的な文献紹介
加古川市立図書館	133,000	約1,500	1.1%	一般的な文献紹介
加古川市総合 文化センター	200,000	約4,200	2.1%	一般的な文献紹介

(平成8.3月末現在)

表2. 表1の10館のうち、何らかの形で病院等に一般図書の貸出サービスを実施している館

館名	サービスの内容
尼崎市立北図書館	労災病院等2カ所に、各々1回40冊程度、団体貸出をしている。
西宮市立図書館	市内の病院に、移動図書館で月1回、巡回貸出をしている。 (1人8冊以内)
加古川市立図書館	市民病院の小児科病棟に、月1回100冊程度配本し、その都度「おはなし会」を実施。クリスマスに人形劇。

あり、レファレンスの段階においても、自信と責任とをもって利用者に対応するのに、甚だ困難な分野であるからである。

調査対象とした10館に対して、医学・医療関係の蔵書数を概数で尋ねたところ、時間的な制約もあったが、一回で期待していたような具体的な回答が返ってきた館は、極く少なかった。

3. 選書基準

調査の対象となった図書館は、すべて一般図書について選書基準が設けられている。

各館において多少異なっているが、基本的な姿勢としては、利用者に対してできる限り要望される資料を提供しようとしていることである。けれども、医学関係の資料に限っては、専門的と見られる資料について「要検討」の一線を画して、収集には慎重である。

現在の公共図書館では、医学関係の専門的知識の不足もさることながら、できるだけ多くの地域住民に利用される資料の収集に主眼を置き、資料の特殊性から、例えば兵庫県立図書館では、タイトルに「臨床」と付く資料とか、あるいは明らかに医師向けのものとか分かる資料は受け入れないなど、不本意ではあるが、一定の制限を設けざるを得ないのが現状である。

患者すなわち一般利用者の知る権利を保障する上からも、当該の基準改正は今後の大きな課題である。

4. レファレンスの実情

最近、公共図書館が受け付けるレファレンスの内容は、驚くほど多岐にわたっている。

中でも医学、医療に関するレファレンスには、電子工学関係とともに、司書泣かせのものが多い。

レファレンスを受け付けた担当司書は、できる限りその人に満足をして帰って頂こうと、躍起になるが、ちょっと聞き馴れない病名の

ことだったりすると、往々にして適確な資料に行き着くことができず、無駄足を踏ませてしまう。

側聞するところでは、英国における公共図書館のレファレンスは医療関係の分野においても、担当司書は豊富な資料の提供に加えて、相当プライベートな部分にまで及んで、相談に乗ることもある、とのことである。

この度の、極く少数の公共図書館に対する調査結果をもって、わが国の公共図書館の全国的な傾向とするには、甚だ危険なことではあるが、これまでの全国大会における実践発表や、「図書館雑誌」（日本図書館協会刊）に見られる情報から推しても、そんなに遠く掛け離れたものではないと考えられる。

《 調査結果 》

兵庫県下10館の公共図書館におけるレファレンスの実情について、聞き取り調査を行ったのであるが、共通した回答が多かった。

- 毎月レファレンスの処理件数を集計しているが、処理内容を記録することは少ない。
- 医学、医療関係のレファレンスを処理しても他の処理方法と同様で、特別に記録に残すことは少ない。
- 文献の紹介や、自館及び相互協力館所蔵の資料で、調べることでできる程度の回答をしている。
- 年間を通じて10～20件程度の医学関係のレファレンスを受け付けていると思うが、それは利用者が、必要がないから少ないのではなくて、期待する資料の少ないの見越しての、結果であろうかと考えられる。

5. 病院と公共図書館

公共図書館はその地域の住民に対して、公平に情報を提供し、個人の知る権利を保障しなければならない立場にある。

もちろん、入院加療中の患者に対しても同一でなければならない。

関東の日野市立図書館においては、67年より、早くも病院、施設などへの図書貸出サービスを開始し、この方面での先鞭をつけたが、最近になってようやく多くの地域で、事例を見ることができるようになった。

ちなみに、加古川市立図書館では、88年より司書が市民病院の小児科病棟を訪問して、図書の貸出やおはなし会などのサービスを実施している。

しかし、これらのサービスは、入院患者をはじめ病院関係者を対象とした、いわゆる一般図書の貸出サービスであって、精神的な支えにはなっても、医療に関する専門的な資料提供や、レファレンスの対応までには至っていない。

6. 今後の課題

最近の公共図書館では、利用者が自由に資料検索のできる端末機を配置して、利便を図っているが、それも今のところ、自館所蔵の資料検索に限られている。

将来は公共図書館が、まず大学図書館と連携して、一般市民へ資料の貸出が行えるようになり、続いて病院図書室ともネットワークを結んで、相互貸借やレファレンスサービスが受けられるようになってほしい。

そのために今一番必要なことは、設置目的を異にする異種の図書館間において、まず所蔵資料の情報交換などを通じて、担当者間の交流からはじめることである。

公共図書館と病院図書室との関係では、専門的な資料提供となれば、必然的に一方的な相互貸借になることが予想される。

その見返りとして、一般図書の貸出サービスが考えられるが、とにかく公共図書館は、病院図書室の資料提供を受けることができるだけの、所蔵資料及び資料内容の把握と、担当司書の資質の向上が図れるような環境づくりに努めることが、先決であると思われる。

7. おわりに

加古川市では、平成9年の秋に市民の健康づくりの拠点として「ウェルネスパーク」がオープンの予定である。その施設の一環として「ウェルネス図書館」の建設が進められている。

開設時に10万冊の図書の開架を予定して、期限付きで委任された生理学や体育学専攻の大学教授、専門教諭など33人の図書選定委員が分担して図書の選定にあたった。

ウェルネス関係の資料を目玉とした、一般市民向けの公共図書館なので、蔵書構成に特徴はあるものの、広く多く利用されることを願っての選書がなされている。

「図書館雑誌」（日本図書館協会刊）96年3月号に、特集で「医学、看護情報をいかに提供するか」というテーマがとりあげられ、病院図書館と公共図書館との連携の必要性が強調されていた。

公共図書館に関する情報を主とする「図書館雑誌」に当該関係の記事が掲載されたのは、93年7月号の特集「図書館利用に障害のある人々へのサービス」《病院図書館の動き、流れ、変化》以来のことで、公共の図書館員が病院図書室との連携に真剣に取り組むのは、いよいよこれから、と言った感がある。

<参考文献>

- 1)石嶋日出男, 日野市立図書館における病院施設サービス, 図書館雑誌87(7): 451-452, 1993.
- 2)菊池佑, 患者や市民の健康医療情報へのアクセス権利, 図書館雑誌90(3): 152-154, 1996.